

ぽっちらかな私は

妹に婚約者を取られましたか、

嫁ぎ先での溺愛がとまりません 2

ロゼリエ

メリーナ達の国の王太女。
訳あって悪女のふりを
していた時期がある。

セド・フォン・シュタイン

クレセットの親友。侯爵家の
次男。王国騎士団所属の
騎士でもある。

サラ・フォン・マクガヴァン

メリーナの専属侍女。
代々騎士を務める子爵家の
第四子。

ヴィンセント

隣国の第二王子。
国の貿易を担う。
姉と同じくクレセットとは
昔からの知人。

ヴェロニカ

隣国の第一王女。
国の軍事を担う。
クレセットとは昔から
面識がある。

登場人物紹介

クレセット・フォン・ラーナ

伯爵。メリーナに誠実で優しい
相思相愛の夫。国防のための
独自の情報網を持ち、
国の内外を問わず恐れられている。

メリーナ・フォン・ラーナ

伯爵夫人。元は冷遇されていた
公爵令嬢。
前世の知識で美容に関する
改革を進め、王太女からの
覚えがめでたい。

◆新婚旅行編◆

私、メリーナ・フォン・ラーナは、ベラーディ公爵家の長女として生を受けた。

幼い頃から家族に冷遇され、婚約者の王太子殿下からは冷たく当たられ、愛されない寂しさを食べることで埋めているうちに、とてもふくよかな体型になってしまった。それは、多大なストレスの結果として仕方のないことではあったけれど、見苦しい見た目は本人の怠慢という認識が蔓延^{はびこ}るこの国の貴族社会において格好の非難の的でもあった。

そして、十八歳になったある日、王太子殿下から婚約破棄を突き付けられた。私の妹であるリリアを新たな婚約者として迎えると宣言され、酷い侮辱の言葉をかけられた時、私は美容部員をしていた前世の記憶を思い出したのだ。

その翌日、悪い噂が絶えない貴族男性の妾として嫁がされる直前に、今の夫であるラーナ伯爵家のご当主、クレセット様が救い出してくださいとお願いした。クレセット様の妻となり、伯爵家の人々に温かく迎えられた私は、優しい環境の中で周囲に報いるため、前世の知識を生かして自分を磨き上げることができた。

結果、様々なことが起こったけれど、私は自分のなりたい姿へと変わり、私を軽蔑してきた人た

ちを見返すことができた。

王太子殿下は結局リリアと結婚したけれど、殿下は国王陛下の側室や複数の貴族夫人と不貞を働き、王室の権威を失墜させたとして、廃嫡されて流刑に処された。

リリアは、殿下の子供を身籠もったと嘘をついて王太子妃の座を得たこと、婚約者だった頃からその権力を利用して多数の愛人と関係を持っていたことから、殿下とは別の流刑地に送られた。

その舞台となった夜会の日から、一年と二ヶ月が過ぎた。

私は夜会の後から先週まで、王太女となられた第二王女、ロゼリエ殿下の補佐役をしていた。私が王太子妃教育を習得していたことや、夜会での姿で以前までの評価を一気に塗り替えたことから、わけあって長らく悪女のふりをしていた殿下が、王太女としての地位を確立するまでの補佐役に、と望んでくださったのだ。今はもう、後任となる宰相閣下のご子息に引き継ぎを終えている。王城で私の護衛をしてくださっていたクレセット様も、本来のお仕事に戻られていた。

王太女殿下の補佐役とその護衛としての仕事は一段落したものの、伯爵家の人間として何かと慌ただし中、私とクレセット様は予定を調整して新婚旅行に出ることができた。行き先は、私たちの住む国の一番東に位置する観光地だ。

「素敵なお店ですね」

街に到着して最初にクレセット様が案内してくださったのは、眼下に海を見下ろせるレストラン

だった。宝石のように輝くエメラルドグリーンの海、晴れ渡る青空、真つ白なテーブルクロスに海と同じ色のお皿が映えて綺麗だ。素晴らしい景色を眺めながらの昼食は、とても贅沢。しっかりと景色とお料理を堪能したいのだけれど……

（クレセット様が、眩しすぎるわ……）

月の光のように輝く銀系の髪と、澄んだ湖天色の瞳。社交界で美の化身とも称される美しいお顔。存在自体が眩しいのだけれど……それに加えて、先程から嬉しそうにたたえられた微笑みが眩しい。そんなクレセット様の視線は、お店に入ってからずっと私に注がれていた。

（とても素敵なお店なもの。私ったら、感動が顔に出ていたのかしら）

私が嬉しい時は、クレセット様もこうして嬉しそうに私を見つめてくださる。それが嫌なわけではなくて、緊張してしまう。お料理が運ばれてきても、視線は私に固定されたままだ。

（どれも美味しそう……）

サーモンのカルパッチョと、パエリアと、ペスカトーレと……海の街らしいお料理の数々に、私の視線はそちらに釘付けになる。

「つ……美味しいです」

新鮮なサーモンが口の中でとろりととろける。クレセット様の視線とお美しさで心臓がドキドキしていても、テーブルに並ぶ料理はどれも美味しくて、手が止まらない。気づいた時にはつい食べすぎてしまっていた。

「たくさん食べる君を見ると、安心するよ」

クレセツト様はそうおっしゃって、優しく目元を緩める。

実は、私がロゼリエ殿下のご公務に同行していた頃は、緊張と多忙と睡眠不足で、度々胃酸過多と思われる症状になっていた。胃酸を抑えて胃粘膜を守るために、キャベツやレタスなどの葉物やブロッコリーばかりを食べていたから、クレセツト様を心配させてしまったのよね……

「その節はご心配をおかけしました。今は元氣とはいえ、あまり食べすぎてはいけないのですけど……魚介類は身体にいいですし、食べた分、運動をすればいいのです」

「それなら、この後の街歩きで消費されるかな」

「ええ。海に着く頃には、きつと」

海はすぐそこに見えるけれど、急勾配の長い階段や坂を下らなければ辿り着けない。お忍び用の動きやすい服と低いヒールとはいえ、石畳の道を歩くのはなかなか体に幹が鍛えられそうだ。

この街は、馬車が通れないほどの狭い道も多い。旅行先の候補に挙がった時にクレセツト様は、私を長く歩かせることを心配されていた。でも私は、運動になるから問題ないとお答えした。旅先のご飯をクレセツト様と一緒にたくさん楽しめる、素敵な街だもの。

(クレセツト様は細身なのに、たくさん召し上がられるのよね)

お店を出て坂を下りながら、食事中のことを思い出す。とても優雅な仕草なのに、お皿の上の料理が気持ちいいくらいに次々と消えていった。

(着痩せするだけで、結構筋肉が付いていらつしやるから)

直接拝見したことはないけれど、抱きしめられた時にいつも逞しさを感じている。それならあの

量をペろりと召し上がられても不思議ではない。

(……私ったら、自分で心臓に追い打ちをかけるなんて)

クレセツト様と手を繋いで、坂や階段を下りている今、ドキドキすることを考えたら余計に息が上がってしまうわ。そんなことを考えているうちに、道が広くなり、視界が開けた。

「綺麗……」

視界いっぱい広がる眩しい海。白い砂浜。貴族の保養地ではないから、砂浜に小さなお店もある。少したけ元の世界の光景に似ていて、懐かしくなった。

「賑やかでいい雰囲気だ」

「ええ。眺めているだけで楽しい気持ちになりますね」

この観光地を選んだのは、パンフレットに描かれた街の様子が明るい雰囲気で見えた、というのも理由のひとつだ。クレセツト様も、この街の人たちがどんな暮らしをしているのか知りたかったそうで、興味深そうに周囲を見渡している。

砂浜には下りず、石畳の道に置かれたベンチに並んで座る。この世界の貴族は、砂浜を歩いたり、ましてや波打ち際で遊んだりしない。貴族の家に生まれ育ったクレセツト様もきつと、砂浜で遊んだ経験はないのだろう。でも私には、前世で友人たちと遊んだ思い出がある。

(浜焼きは、さすがに無理よね……)

懐かしい記憶と一緒に美味しい記憶があるものだから、ただ眺めるだけでは少し勿体ない気持ちになつてしまう。でもやっぱり浜焼きは無理だわ。平民の変装だとおっしゃっていたクレセツト様

が、あまりにも輝いているもの。シンプルな服装だと余計に高貴な雰囲気が際立っていて、砂浜にいる人たちを萎縮させそうだ。

（目を網に載せて焼く、クレセット様……）

想像しようとしても難しい。せめて焼けた魚に塩を振るくらいは……それも違和感があるわね。ふと隣を見ると、クレセット様も何かを考え込んでいた。

「メリーナ。明日は、あれに挑戦してみないか？」

難しいお顔で示したのは、前世で言うところの牡蠣小屋だ。とはいっても、この世界の人たちは牡蠣を食べないから、看板には網焼きと書かれている。クレセット様は、楽しそうに貝や魚を焼く人たちに興味津々のようだった。

「ええ、ぜひ。私も気になっていました」

「それを聞いて安心したよ。私の髪色は目立つようだから、明日は黒に染めようと思う」

「黒、ですか……？」

「似合わないだろうか……」

「いえ、昔一度拝見した時もとてもお似合いだったので、今からドキドキしてしまって……」

まだお互いを知らなかった幼い頃、街で道に迷った私を広場まで連れて行ってくださったのが、クレセット様だった。お仕事で黒髪に染めていらしたのだけど、またクレセット様の黒髪を拝見できると思うと、胸が躍って仕方なかった。

「でしたら、私も染めた方がいいでしょうか？」

「君に似合う色を用意させるよ。私も、明日が楽しみだ」

クレセット様の手が私の頬に触れる。顔をそちらへ向けられると、楽しそうに微笑む湖水色の瞳が私を映していた。

「君が可愛いことを言ってくれたお礼だよ」

クレセット様は甘く微笑んで、私の頬にキスをする。

新婚旅行はまだ始まったばかり。こんな調子で、私の心臓は最終日までものかしら？ ドキドキしている私に追い打ちをかけるように、優しく髪を撫でられて、私の顔は真っ赤に茹だつてしまった。

そして、翌朝。

黒髪のクレセット様は想像以上に凛々しく、神秘的なお美しさもあって、私は心臓が痛いほどにドキドキして直視できなかった。それなのに私の栗色に染めた髪を手に取り、「可愛いよ」と甘く微笑んで口づけるものだから、私はその場に崩れ落ちてしまった。

朝からそんなことがありながらも、私たちは今、じゅうじゅうと音を立てて焼ける海鮮を前にしているのだけど……

「君、ひとり？　すごい可愛いじゃん。あつちで俺たちと一緒に食べようよ」

お手本のようなナンパに遭遇してしまった。この世界にもこういう男性たちがいるのね……貴族社会にはいなかったから、なんだか前世を思い出して懐かしくなる。

「すみません、連れがいますので」

「連れ？ どこだ？」

男性たちはニヤニヤして、わざとクレセット様を無視する。そうよね。本当にクレセット様かと思うほどに輝きが消えているのだから。以前おっしやっていた通り、完璧な平民に擬態していた。

「彼女の夫が、ここにいるが？」

私に触れようとした男性の腕を掴み、黒縁の眼鏡を外した瞬間、クレセット様の眩しさが復活した。私からは微笑んだ横顔しか見えなかったのに、男性たちは怯えたように小さな悲鳴を上げて、腕を痛がりながら小屋から出て行ってしまった。

「すまない、メリーナ。不快な思いをさせたね。これは外しておこう」

「いえ……助けていただいてありがとうございます」

クレセット様は優しく微笑み、今度は眼鏡をかけずに、シャツの胸ポケットに入れた。

（あの眼鏡、特殊な何かなのかしら……）

光を放つほどに輝くクレセット様の存在感を消してしまえるなんて……でもこの世界に魔法の道具はないから、演技力が素晴らしいのね。そう納得した途端、ナンパ男たちをあつさりと撃退してくださった頼もしさと格好良さを思い出して、またドキドキしてしまった。

「メリーナ、焼けたよ」

「ありがとうございます。とても美味しそうです」

クレセット様はしっかりと焼けたホタテを、紙皿……ではなく、銀食器の上に載せる。私の侍女

のサラさんが、素早い動作で並べていったものだ。クレセット様はホタテを綺麗にナイフで切つてから、私の前へと置いてくださった。

絶対にお忍びの貴族だ、と噂していたお店の人たちは、手慣れた様子で食材を焼くクレセット様を見て、「驚くほどに顔がいい平民なのかしらね？」と囁き始めている。

（完璧な変装というのは、外見だけではないのね）

クレセット様はホタテを切らずにフォークで刺して、そのまま口に運ぶ。周囲と同じ行動が自然とできる演技力。またひとつ、クレセット様の魅力を知った。

その後、全身から美味しい香りのする私たちは、一度宿に戻ってシャワーを浴びた。染めた髪は数日経つか、専用のシャンプーでなければ色が落ちないそうで、綺麗なままだ。

お昼前にチェックアウトをして、馬車で次の目的地に移動する。目的地の中央地区には、美術館や博物館が集まり、南の地区とはまた違う魅力があった。クレセット様が案内してくださった美術館を、ゆったりと数時間かけて回る。

前世では美術館に行ったことはほとんどなくて、なんて勿体ないことをしていたのだろうと思う。筆の運びや美しい色使いを近くで見られる、素晴らしい場所だった。特別展は様々な色彩を組み合わせた絵が多かった。個人的な好みで言えば色鮮やかな絵画が好きなので、たくさん見られて嬉しい。クレセット様が私の好む美術館を選んでくださったのかもしれない。

「クレセット様、ありがとうございます。とても楽しかったです」

「気に入って貰えて良かった。私も楽しかったよ」

優しく微笑んで、私の手を握る。もしかして鑑賞中も絵ではなく私を見ていらしたのかも、と思うたけれど、何度かクレセット様を窺った時は、視線はきちんと絵に向けられていた。

（私、少し自意識過剰になっているわね）

レストランですっと視線を受けていたから、勘違いしてしまった。恥ずかしいわ。

美術館を出て、夕食を終えた後は、今日から数日滞在する宿へと向かった。

「旅行を楽しんで欲しくて、言えなかったのだが……」

お部屋の前で、クレセット様は重々しくおっしゃる。ドアノブに手をかけたまましばらく動きを止めてから、ゆっくりとお部屋の扉を開けた。

「今日から私たちは、同室で……ベッドが、ひとつしかないのだが……」

「……夫婦なのに別々のお部屋では、不仲だと思われそうですものね？」

動揺が声に出ってしまったけれど、なんとか平静を装って微笑んでみせる。この世界の、特に貴族なら、夫婦で同じ寝室が一般的だ。でも私たちは夫婦になった経緯が少し特殊で、何よりクレセット様が私の気持ちを尊重してくださっているから、今もお屋敷では別々の部屋のままでした。

「こんなに広いのですから、窮屈にはなりませんし、私が一緒でももう大きく軋むことはないと思います。あつ、私はソファで寝ようかしら？ ふかふかだもの……」

ソファに座ると、実家で冷遇されていた頃に使っていたベッドより断然ふかかだった。これなら普通に寝られるわ。

「メリーナ。ソファは、私が」

「いいえ、クレセット様はベッドでおやすみくださいませ」

「君をここで寝させるわけにはいかないよ」

「私は大丈夫です」

「私が大丈夫ではないのだが」

つい言い合いになってしまった私たちは、ぼつりと呟くサラさんの声で我に戻る。

「夫婦喧嘩……美味しいです……」

私たちに夢中になっているような声を出しながら、部屋全体へ視線を配ることも忘れないサラさんは、王国に仕える騎士を輩出するマクガヴァン子爵家のご令嬢だ。サラさん自身も剣を扱うため、この旅行中も私の侍女と護衛を兼任してくれている。私が嫁ぐ以前からラーナ伯爵家にお仕えしていることもあって、クレセット様とは心が知れた仲だ。背が高くて大人っぽい雰囲気だけど、恋愛小説が好きで、好きなものを語る時は早口になる可愛い一面を持つ、魅力的な女性だ。

そんなサラさんの声にはっとして彼女に視線を向ければ、サラさんの奥にいる私付きのメイドのドロシーとデイジーも、こちらを見てにこにこしていた。

（そうだね、二人きりではないのよ……）

新婚旅行とはいえ、貴族の私たちは完全に二人きりというわけにはいかない。彼女たち以外にも、数名の従者が別室で待機している。

「……メリーナ。広いベッドだ。端と端ならいいだろうか」

「ええ……そうですね」

サラさんたちとは気心が知れていても、私はラーナ伯爵家の女主人。今更だげど背筋を伸ばすと、クレセット様は「可愛い」とおっしゃって甘い微笑みを浮かべた。

（私の全てを肯定してくださるのよね……）

何をしても、可愛い、好きだ、と嬉しいお言葉ばかりが返ってくる。

ダイエツト前の私のことも全て受け入れて、応援してくださいました。だから私はくじけずに努力を続けられて、自分のなりたいたい姿になった。私さえいなければと自分を卑下することもなくなった。クレセット様がいてくださるから、私は前を向いて進んでいける。

（クレセット様のもとに嫁いだから、嬉しい変化ばかりだわ）

クレセット様と並んでソファに座り、今という幸せを噛みしめる。同じベッドで眠ることも、いつかきつと、緊張することなくただ幸せなこととして考えられる日が来るはず。

サラさんたちが部屋を出ると、クレセット様に肩を抱き寄せられる。髪を撫でてくださる手が心地いい。旅行に出る直前まで、私たちはずっと忙しかった。こうしてただ寄り添って、ゆったりとした時間を過ごすのも久しぶりだ。

「綺麗で可愛いお花ですね」

広いテーブルの上には、白磁の花瓶に飾られた、白いカスミソウと赤い薔薇のブーケが置かれている。ちょこんとした小さな薔薇たちが愛らしい。

「……メリーナ。君が妻として初めて屋敷を訪れた日のことを、覚えているだろうか」

しばらく薔薇を眺めていると、クレセット様はとても優しいお声でそうおっしゃった。

「君を迎えた応接室に、青い薔薇を飾っていたのだが」

「ええ、覚えています。氷でできたような花瓶も、青い薔薇も、とても神秘的で美しかったです」私の答えに、クレセット様は嬉しそうに目を細める。

「青い薔薇は、一昔前までありえない存在の比喩だった。それが、とある研究者が人工的な開花を成功させたことから、この花の持つ意味が、奇跡や神の祝福というもの変わったそうだ」

「奇跡……」

この世界でも、青い薔薇は元々存在しなかったのね。

「五本の薔薇にも、意味があるそうだ」

そこで言葉を切り、少しひんやりした手のひらが、私の頬を包み込む。

「メリーナ。君に出逢えて、本当に良かった」

「っ……」

「君と夫婦になれたのは、奇跡だ。神は、私を見放していなかった」

目の前で甘く微笑まれて、心臓がドツと鳴った。顔が熱い。それどころか、全身が熱い。

そんな私の頬を撫でて、花の持つ意味を教えてくださいました。青い薔薇の花言葉が『奇跡』、五本の薔薇の花言葉が『あなたに出会えて良かった』。

（クレセット様は、そんな想いを込めてあのお花を飾ってくださいっていたの？）

ただ美しいだけの花ではなかった。女心に疎いとおっしゃっていたのに、花言葉で私に想いを伝

えてくださっていたなんて……

「人に贈る花は意味を持つというのは、たまたま耳にした情報だった。いずれ王太子妃となる君に花を贈る日は訪れないと理解しながらも、調べずにはいられなかったよ」

寂しげに微笑むお顔。私がまだ王太子殿下の婚約者だった頃、クレセット様は、いつもこんなお顔をされていたのだろうか。

「申し訳ありません、私、お花の意味を何も知らなくて……」

「むしろ知らないことを願っていたよ。初対面で私の重い愛に気づいてしまったら、君が逃げ出してしまうのではないかと、内心では不安だったからね」

「クレセット様、とても落ち着いていらしたのに」

「表に出さないように必死だったよ」

クレセット様は、今だから言えると少し恥ずかしそうに目元を緩めた。

嫁いだあの日、自室に初めて入った時に飾られていた薔薇は七本だったそうだ。『密やかな恋』という意味があり、今まで言えなかった想いを込めて飾ってくださっていたという。

クレセット様がお仕事で不在の日に飾られていた薔薇は、九本。その意味は……『いつも、一緒にいたい』。

（クレセット様の想いは、いつも私のそばにあったのね）

私がカフスを贈ったように、クレセット様も、離れていても私を想ってくださっていた。愛しさが胸いっぱいに溢れて、クレセット様の服をぎゅっと握った。

「クレセット様。いつもそばにいてくださって、ありがとうございます。あ……愛して、います」
まだ恥ずかしくて小さな声になってしまう。それでも顔だけは上げて、クレセット様の瞳をまっすぐに見つめた。

「メリーナ……私も、君を愛している」

驚いたように見開かれた瞳が、すぐに甘く細められる。優しく頬を撫でられて、温かな体温が私の唇を塞いだ。

（キスだけでも、心臓が痛いのに……）

唇が離れて、抱きしめられて、髪にも口づけられる。クレセット様はもう平気なようだけれど、私はこんなにもドキドキしている。こんなことで、同じベッドで眠れるかしら……いえ、全く眠れる気がしないわ。クレセット様が眠られたらソファに移動しましょう。

「メリーナ。君がソファに行ってしまったら、私は今日、眠れそうにない」

「っ……」

「それでも、君の考えていることが分かるようになったつもりだよ」

私の頬を撫でて、にっこりと笑う。思わず顔を背けたら、顎を掴まれて優しく顔を戻されてしまった。

「あ……あの……」

「同じベッドの端と端で眠ると決めたはずだよ」

「はい……ソファに移動するのは、やめます」

クレセツト様には、嘘も誤魔化しもきかない。おとなしくお約束すると、子供のように頭を撫でられた。

「安心して欲しい。私も緊張している」

「えっ……」

「愛する人がそばにいるというのに、平静ではられないよ」

抱きしめられて、クレセツト様の背に腕を回すと……触れた手のひらに、トクトクと速い鼓動が伝わってきた。

「クレセツト様も、私と同じなのですね」

「顔に出ないだけで、君より鼓動が速いかもしれないな」

素直な言葉をこぼすクレセツト様が、可愛いと思ってしまう。この一年で様々な表情を見せてくださるようになったことが、とても嬉しかった。

「君は私の最愛で、私の宝物だ」

穏やかなお声で紡がれる言葉。流れるように愛の言葉をくださるのに、クレセツト様の鼓動は速いままで、とても愛しくなる。

「その意味を持つ十一本の薔薇を、この一年の間に何度も君の部屋に飾っていた。君は私のことを重い男だと……陰湿な男だと思わず、逃げずにいてくれるだろうか」

不安に揺れる湖天色の瞳。本数の意味を今までお話ししてくださらなかったのは、私に逃げられないためだったなんて、愛しい以外にない。



「逃げるなんてありません。こんなにも愛してくださって……とても嬉しいです」

愛しい、好き、と込み上げる想いを言葉にするのは、まだ少し恥ずかしい。頑張って落ち着いた答えを返したら、クレセット様は「良かった」とおっしゃってとても甘い微笑みを浮かべた。

「合計するともうすぐ一年と同じ数を贈ることになるのだが、私がいつも言っていることだから、驚きはないかもしれないね」

明るいお声になるクレセット様。こんなにも感情豊かなのに、今でも王城や夜会で、冷酷な伯爵と噂されているのが不思議でならない。

三百を超えた薔薇の意味を私は知らないのだけど、クレセット様がいつもおっしゃること、ということは、ずっと愛している、とか、いつも想っている、とか、そういう言葉かしら……

「ちょうどその本数になる日に贈る薔薇を、二本にするか四本にするかで迷っていてね。どちらにせよその時は、飾るのではなく、直接君に、言葉と共に贈ろうと思っている」

以前、初めての夫婦旅行で、クレセット様はプロポーズを予告してくださった。その時のように予告してくださるから、その日が待ち遠しくなる。

「それがいつになるかは、内緒だよ」

私の顔を覗き込んで、いたずらっぽく笑う。私がこの顔に弱いと理解している表情だ。

（クレセット様ったら、本当に私のことをよく分かるようになられて……）

赤くなった私の頬を撫でて、また「可愛い」と柔らかく微笑むものだから、たまらずにクレセット様の方にへたりと倒れ込んでしまった。

その後の夕食はお部屋で、街の特産品を使用した郷土料理をいただいた。その中にちらし寿司に似た料理があり、また懐かしい気持ちになった。街で作られている白ワインも美味しかった。この街を選んで良かったとクレセット様とお話して、明日はこの美術館と博物館に行こう、とパンフレットを見ながらお話しするのも素敵な時間だった。

夜も更けてきて、部屋に二つあるバスルームで、栗色に染めた髪の色を落とす。

（前世の私も、これに近い髪色だったわ）

今朝、髪を染めた時に、鏡に映った自分に懐かしさを感じた。今ではもう水色の髪の方が見慣れてしまったけれど、前世の自分を完全に忘れてはいない。

つらいことも多い人生だった。でも、私が精一杯生きた日々を忘れたくない。そう思えるようになったのも、クレセット様に出逢えたおかげだ。共に過ごした時間はまだ二年にも満たないけれど、クレセット様は私の中でも大きな存在になっている。前世では、長く付き合った恋人に、若さがなくなれば価値がないという書き置きひとつで捨てられてしまった。もし今世でも同じようになつたらと考えるだけで、心臓が凍りそうな心地になるけれど……クレセット様は大丈夫だと、今の私は信じられる。

（黒髪も、クレセット様がされると神秘的だったわ）

前世ではありふれた色だったのに、クレセット様の黒髪は全く違う色のように見えた。黒髪に湖水色の瞳だから、余計にそう思ったのかもしれない。クレセット様なら、どんな髪色でもお美しいはず。金や青、緑、紫……想像して、似合わない色はあるかしら？ と首を傾げてしまった。

そんなことを考えていたら、つい長風呂になってしまった。慌ててバスルームを出た私は、そこで固まってしまう。

(そうだったわ……)

お屋敷では、私とクレセット様は別々の部屋だ。当然、入浴後から朝までは顔を合わせない。つまり……髪を下ろしたクレセット様を、私は今まで見たことがなかった。

「メリーナ？」

思わず顔を背けてしまう。すると、ソファに座っていたクレセット様が立ち上がる音がした。

「申し訳ありません、少しだけ、離れていてください……」

「何故……」

「髪が……」

「髪？ 乾かし方が足りなかっただろうか」

「いえ、そうではなくて……」

説明したいのに、あの、その、としか出てこない。

「……そうか。髪を下ろすと、これほど意識してくれるのか」

私がドキドキしている間に、クレセット様は正解を導き出してしまった。

「黒髪よりも、元の色の方がメリーナは好みだろうか」

「黒髪のクレセット様も、ドキドキしました……神秘的でお美しいのですもの……」

「栗色の髪のメリーナも、美しく可愛かったよ」

落とした視線の先に、つややかな銀糸が流れる。少し水気を含んだ髪が、私たちの結婚指輪のように目映く輝いていた。

「だが、やはり私は、メリーナの生まれ持った色が愛しい」

クレセット様の指が、私の髪を摘んで、愛しいと示すように優しく撫でた。

「私も……クレセット様の銀色の髪が……」

好きです。そう言いたくて顔を上げたのに、髪を下ろしたクレセット様をすぐ目の前で見てしまい、真っ赤に茹^ゆだる。

「君は、日々可愛くなるな……」

そんな私を、クレセット様は壊れ物のように優しく抱きしめてくださった。

嫁いってから一年以上経っても、お忙しいクレセット様とはたくさんの時間を共有できていない。

私がロゼリエ殿下の補佐役をしている時は、護衛としてそばにいてくださったけれど、あくまで公の場での距離感だった。だから私は、好きな気持ちを抑える方法も、照れずにいる方法も、まだほとんど分からない。

(時が経つほど、格好良くなるのかも)

私ばかりがドキドキしているのではないことは、先程知った。それでも私の方が意識させられていると思う。しまう。

「少し話をしようか」

そうおっしゃって私の手を取ったクレセット様から、ソファにエスコートされる。髪を下ろした

クレセット様に慣れる時間をくださったのに、私のドキドキは一向に収まる気配がなかった。

お話ししているうちに夜も更けて、私たちはベッドに移動する。横になると無意識に向かい合わせになって、視線が重なった。

「……メリーナ、誤解しないで欲しいのだが」

「はい……私も、背中を向けてもよろしいでしょうか……」

同じことを考えていた私たちは、静かに背を向けた。広いベッドの端と端だとしても、顔を見ながらでは、とてもじゃないけれど眠れない。

「私たちが結婚して、もうすぐ二年か」

「ええ、そうですね」

「……帰ったら、同じ寝室にしてもいいだろうか」

緊張したお声でそう告げられた。私の寝室のベッドは一人用なので、クレセット様のお部屋に移る、ということだろうかと思っていたら、言葉が続く。

「君の寝室に、クローゼットがあるだろう？」

「はい……」

「今はあれで、扉を塞いでいる」

「扉、ですか？」

「その向こうは、夫婦の寝室だよ」

私の寝室とクレセット様の寝室は、隣同士。その間隔が広いとは思っていたけれど、まさかもうひとつお部屋があったなんて。

「私も君も、忙しい身だ。できれば眠る時くらいは、そばにいたい」

それは、私も同じ気持ちだ。夕食後にお話する時間を取ってくださっているのに、朝までの短い間に、クレセット様にお会いしたいと思うことは何度もあった。私の起床時間より早くにお仕事に向かわれて、朝のご挨拶ができないことも何度もある。

会えない時間が長いから、一緒にいられる時間がとても貴重だから、このご提案を嫌だなんて思うはずがない。

「私も、同じです。少しでも長く、クレセット様のおそばにいたいです」

「つ……私もだよ。ありがとう、メリーナ」

心からの喜びを伝えてくださる優しいお声。私からも想いを込めて、お礼を伝えた。

「ただ、すまない。厄介な任務の前日は、別にしてもいいだろうか。今のように緊張して、一睡もできない可能性が……」

「もちろんです。クレセット様の身に危険のないことが一番大切ですもの」

危険なお仕事もされているのだから、集中力を欠いては命取りになる。しっかりと睡眠を取っていただきたいわ。

「ありがとう、メリーナ」

お礼を言われる時に、クレセット様のお顔が見えないのが不思議だ。そう思うほどに、いつも私

のことをしっかりと見つめてくださっているのだと気づかされた。

（私も、きちんと想いを伝えられるようにならないと）

そのためには、一緒にベッドという荒療治は効果的かもしれない。

「クレセット様。週に一度から、慣れていきませんか？」

「週に……二度はどうだろう」

「そうですね……週に一度では、慣れるまでに長い時間かかってしまいますよね」

「今回の旅行では、残り八日同じベッドになるのだが」

「旅行の間に、少しでも慣れればいいのですけど……」

「すまない。私は難しいかもしれない」

「私もです」

とても無理というお声を出すクレセット様に、小さく笑って同意した。

一緒にいたいのに、そばにいとドキドキして胸が苦しい。クレセット様も同じ気持ちでいてくださることが嬉しかった。

結婚後初めての夫婦旅行は三日しか滞在できなかったけれど、今回は十日も滞在できる。とはいえ、当初のクレセット様は「新婚旅行なら最低一ヶ月だ」とおっしゃって、休暇の再申請をされていた。結局、受理されなかったのだけだ。

「今回は、十日で良かったかもしれませんね」

「そうだね。次はこの状況に慣れていると信じて、二ヶ月の休暇を受理させるよ」

「ふふ、二ヶ月も旅行ができれば、素敵ですね」

クレセット様のお立場では、引退されるまではきつと難しいのに、その日を想像してしまう。

「私の代わりに、セドの兄と……両親が若いうちなら、現役復帰も……」

小さく呟かれたお声。クレセット様なら、本当に叶えてしまうのかもしれない。

たくさんの人たちに助けられて、今の私たちがある。そして、クレセット様が私を見つけてくださったから、愛してくださったから……その全てが、素敵な奇跡。

（愛しています）

胸が熱くなり、想いが込み上げる。もうこぼれてしまいそうなのに、クレセット様のように自然に言葉で伝えられるようになるには、私にはまだもう少しだけ時間がかかりそうだった。

◆隣国編◆

それから最終日まで、あつという間に過ぎていった。今日で新婚旅行も終わり。十日間も一緒にいられてとても幸せな時間を過ごせたのに、まだ足りないと思ってしまう。

「名残惜しいな……」

「ええ、私もです……」

素直な気持ちを言葉にすると、優しい微笑みが返る。クレセット様は私の手を取り、しばし考え込む様子を見せた。

「……不測の事態が起こったことにして、数日延ばすか」

「ふふ、クレセット様ったら。でも、そうできたら素敵ですね」

真剣なお顔でおっしゃるから、本気かと思ってしまう。クレセット様はお忙しい方だから、それが無理なことは私もちゃんと分かっているわ。

名残惜しさを抱えながら馬車に乗り込もうとした時、突然、背後から声がした。

「クレセット、か？」

振り返ると、パンツスタイルの白い軍服を着た、凛々しい女性が立っていた。

（綺麗な人……）

高い位置で結った華やかに波打つ髪は、海のようなエメラルドグリーンだ。琥珀色の瞳は、海を照らす太陽のようで美しい。

「ああ、やっぱりクレセットだ。久しいな、私を覚えているか？」

「……ご無沙汰しております」

上位の方に向けた振る舞いをするクレセット様の眉間には、皺が寄っている。でも、私の方を振り向いた時には、柔らかな表情に戻っていた。

クレセット様が敬意を示す方で、私がお顔を存じ上げない方……他国の方かしら？

「メリーナ。こちらは、隣国の第一王女のヴェロニカ殿下だよ」

隣国の王女殿下と聞き、私は慌ててカーテシーをした。

「殿下。私の最愛の妻の、メリーナです」

「彼女が噂の、ラーナ伯爵夫人か。私は結婚式にも呼ばれていないから、初めまして、だな？」

「しがない伯爵の私が、隣国の王族をご招待するなどおこがましいことです」

「そうかそうか、数年会わない間に口が上手くなったな」

王女殿下は快活に笑う。後ろに控えている従者たちも微笑みをたたえて殿下を見守っていた。

私たちの国では、女性は淑やかに、夫を立てる良き妻であれと、その道だけを教えられて育つ。それがこの世界でも時代遅れなのだと、目の当たりにした。

（この一年で、人々の認識はだいぶ変わってきたけれど……）

王太子殿下が廃嫡され、ロゼリエ殿下が王太女になられて、王城の要職や騎士団でも女性の登用

が増えている。それでもまだ、女性が自由に好きなことを選ぶには、偏見が残っている。隣国のように偏見がなくなるには、あとどれくらいかかるだろうか。

「メリーナ殿。私のことは敬称ではなく、ヴェロニカと呼んでくれ。これから何度も顔を合わせる機会があるだろうからな。よろしく頼む」

明るい笑顔で手を差し出され、畏れ多くもその手を取る。ハキハキとして輝いている殿下……ヴェロニカ様は、私の手をぎゅっと握ってくださった。

「ここで会ったのも何かの縁だ。二人とも、城に寄っていけ」

「結構です」

「まあそう言うな。仕事のことなら、私から手紙を出しておくから心配しなくていい。なんなら、王族命令とでも書いておこうか？」

明るくおっしゃるヴェロニカ様を、クレセット様は遠慮なしに睨む。でもすぐに溜め息をついてヴェロニカ様のお申し出を了承された。

私たちが旅行で訪れていたのは、国の最東端の都市だ。南側は外海、東側は内海、その内海を挟んですぐ向かい側に、ヴェロニカ様の国である隣国がある。

ヴェロニカ様は、私たちの国の国王陛下に急ぎの伝令を出してくださいました。私とクレセット様は今、ヴェロニカ様所有の船で隣国へと向かっている。

「滞在の延長は望んだが、こういう不測の事態は望んでいない」

船の甲板で、海を背景にクレセット様がぼやく。

（海とクレセット様、絵になりすぎて眩しいわ）

太陽の光を弾いて輝く海と、それ以上に輝くクレセット様。このお方が私の夫だなんて、未だに信じられない時があるのよね。

「すまない、メリーナ。君だけでも帰ったかったのだが」

「ヴェロニカ様のご意向ですもの。クレセット様が謝罪されることはありませんわ。それに……クレセット様とまだ少し一緒にいられて、嬉しいのです」

素直な言葉を伝えると、クレセット様にきつく抱きしめられる。

「メリーナ……このまま君を、連れ去ってもいいだろうか」

「っ……はいっ」

熱烈な口説き文句に思わず頷いてしまったところで、声がかかる。

「連れ去らずとも旦那様の奥様です。今逃避行をされると、両国間に何かしらの問題が起こるかと」

クレセット様にますます抱き寄せられて振り向けないけれど、この声はサラさんだ。

「マクガヴァン……結婚式の時も似たような会話でお前に邪魔された覚えがあるんだが」

「一年以上経つても奥様と仲睦まじく、私としては大変美味し……嬉しいのですが、旦那様にお客様です」

「いつ声をかけようかと思っていたんだがな」

この声は、ヴェロニカ様？ 慌ててクレセット様から離れようとすると、まるでダンスのように身体が反転して、クレセット様の背後に隠された。

「そう怖い顔をするな。私とお前の仲じゃないか」

「失礼ながら、親しくなるほど私的な会話をした覚えはございません」

「相変わらず冷たい奴だな」

隣国の王族がお相手なのにとハラハラしたけれど、ヴェロニカ様は気にもせずに笑い飛ばした。「まあ、お前にとってはただ仕事で滞在しただけなんだろう。戦友と平和な時代に食卓を囲むのが夢だったと、父親同士は言っていたが」

隣国の国王陛下とクレセット様のお父様はご友人だと、以前に聞いたことがある。それは争いの絶えない混乱した時代の中で、共に戦ってきた絆だったのだ。

（クレセット様とヴェロニカ様も、本当は親しい間柄なのかしら？）

私の前だから配慮してくださっているだけで、本当は幼馴染のセドさんと同じように、仲がいいのかしら？ そう考えると、途端に胸がモヤモヤとする。

（想像で嫉妬するなんて、いけないわね……）

身に余るほどに大切にしていたのに、その気持ちを台無しにするようなことを考えてはよろしくない。それに、お二人の仲がいいのなら、私のせいでギクシャクするようなことはあってはならないわ。そんなことを考えている間も、話は進む。

「ふっ……そうか、クレセットともあるう者が、そう必死になってまで誤解されたくないのか」

「誤解もですが、妻を傷つける可能性のある要因は、全て排除したいのです」

「お前の妻は、そんなにも弱いのか？」

「妻は、強く美しい女性です。私が守らなくとも生きていけるからこそ、私は愛想を尽かされないように、必死で繋ぎ止めているのです」

優しく細められた湖水色の瞳が、私を見つめる。ヴェロニカ様は「そうか」とおっしゃって、楽しそうに口の端を上げた。

クレセット様はそうおっしゃるけれど、私が強くいられるのは、いつもクレセット様がそばにいて励ましてくださるからだ。だから私は、自信を持って私のやりたいことをしてこられた。

（私も、クレセット様の助けになりたい……）

そう考えるのもおこがましいほどに、クレセット様はなんでもできてしまうけれど……それでも何か、私にできることはないだろうか。今まで助けていただいた分も、恩返しをしたい。

（私は、ラーナ伯爵夫人として、クレセット様とラーナ家を支えられる自分になりたい……）

隣国には、ヴェロニカ様のように自立した強い女性がたくさんいるはず。彼女たちを見て、学んで、滞在中に私に何ができるか答えを出したいと、私の中で目標が生まれた。

隣国の王城は、まるでおとぎ話のお城のように煌びやかだった。

白い外観に、青い円錐状の屋根がいくつも並んでいる。庭園には大輪の花々が咲き誇り、エントランスをくぐれば、輝くシャンデリアと、よく磨かれた白い大理石の床が現れる。その白い床に、

正面階段の上段まで続く赤い絨毯がとても綺麗に映えている。どちらかと言えば質実剛健な私たちの国の王城からすれば、目映いほどに輝いていた。

お忙しい両陛下がお時間を割いてくださり、ご挨拶を終えると、すぐにヴェロニカ様から会議室に案内された。席に着くなり本題を切り出される。

「私たちの国と国境を接する敵対国が、この国に対して開戦の動きを見せている。まだ確定ではない状況で下手に刺激して、本格的な戦争になったら困る。しかし手をこまねいているうちにそちらの国に矛先が向いても困るから、クレセットの考えも聞きたくてこの国に呼んだんだ」

「やはりそういうことでしたか」

クレセット様は溜め息をつく。

（だから軍事関係者ではなく、クレセット様が呼ばれたのね）

ラーナ伯爵家は、代々国王陛下の勅命を受けて動く一族だ。国防に関わる重要なお仕事をしても、正式には軍人ではない。もしヴェロニカ様とお会いしたあの場所に敵対国のスパイがいたとしても、偶然再会した旧友を招待しただけに見えるだろう。

クレセット様はヴェロニカ様の意図に気がついていたからこそ、私的な会話をし、城への招待も一度断った。だとしたらヴェロニカ様は、クレセット様があの街を訪れることを知っていたのかしら？

「お前のことだ。敵対国の動きもかなり前の段階から把握していたんじゃないか？」

「殿下。詳しい話は後ほど」

クレセット様がそうおっしゃった直後、ノックの音が響いた。ヴェロニカ様が入室の許可を出すと、扉が開く。

「クレセット、久しぶりだね」

入ってきたのは、ヴェロニカ様と同じエメラルドグリーンの髪の、美しい男性だった。ふわりと揺れる前髪から覗くのは、太陽のような琥珀色の瞳。穏やかな微笑みをたたえた唇と……

（なんて綺麗なお肌なの……）

思わず視線が釘付けになる。つるりとして滑らかで、陶器のよう。クレセット様のさらりとした質感のお肌とも違う、ツヤのある肌質だ。

（基礎化粧品、何を使っているのかしら……）

クレンジングと洗顔も知りたい。ジッと見つめていたら、優しく微笑まれた。

「メリーナ殿は、弟のような男が好みか」

「メリーナの好みは私ですが？」

クレセット様は不機嫌そうにおっしゃって、私の手を握る。

「あの、お肌が、あまりに綺麗で……」

慌ててクレセット様に誤解だと訴えると、不機嫌の矛先がお相手に向いてしまった。クレセット様に睨まれても、彼は穏やかな微笑みを崩さない。

「あなたがラーナ伯爵夫人ですね。噂通りの美しいお方だ」

「紹介しよう。私の弟で、第二王子のヴィンセントだ。この国は美を尊ぶが、その中でも弟は特に

美意識が高い」

私は慌ててご挨拶をする。もち肌に見惚れていて、王子殿下に失礼をしてしまった。

「夫人、あなたなら理解していただけるでしょうか。多くの人が塗るだけで綺麗になる化粧品を求めますが、最も大切なのは土台となる肌の状態であると、僕は考えています」

王子殿下は真剣なお顔でおっしゃる。

「基本は、塗った化粧品と肌の汚れをしつかりと落とし、肌が乾燥しないよう、潤すことです」

「おっしゃる通りです」

「荒れた土地では作物が上手く育たないのと同じですね」

「私もそう思います！」

殿下のお言葉には同意しかない。

この世界には塗る美容ばかりで、落とす美容の概念がない。伯爵家に嫁いだ後に色々調べて驚いたことだった。だからその話ができる人に初めて会えた喜びで大きく頷くと、殿下はまるで花が綻ほころぶような笑みを浮かべた。

「ラーナ夫人。どうか、僕の開発した洗顔料の広告塔になっていただけませんか？」

「私が、ですか……？」

「僕がいくら重要性を訴えても、国民からは、元がいいからだと言われてしまうのです」

お顔立ちがいいのは同意しかないけれど……きつと殿下は、努力してこのお肌を保っておられるのね。その点、以前の私は肌荒れも酷かったから説得力がある。……いえ、隣国で以前の私の姿を

知っている方がいるかは分からないけれど。

「あなたは努力して美しくなられた。あの冷酷なラーナ伯爵を落とした、聡明で美しい妻。我が国でも噂になっているのです」

「そのように恐れ多い噂が……」

「メリーナ。君は心根が美しく聡明で努力家で素晴らしい女性だ。新たな国の指針となり、愚か者共の目を覚まさせたのだから、この国にとどまらず世界中に噂が届いていてもおかしくないよ」

「クレセット様……」

褒められすぎて戸惑う私をクレセット様が抱き寄せると、王子殿下はクスリと声を漏らした。

「数年会わない間に、クレセットは随分と面白い人間になったね」

「私は真実しか申しておりません。わずか一年ほどで、我が国は大きく変わりました。各分野で女性の登用も進んでいます。妻の功績は、叙勲などでは到底足りない」

クレセット様は、重々しいお声でおっしゃった。

実は私は、国に多大な貢献をしたとして、国王陛下より直々に勲章を授与された。でも私はただ、私を虐しいたげてきた家族を、元婚約者を、見返したかっただけ。そのために頑張つて今の姿を手に入れた。私が変われたのも、クレセット様と周囲の人たちが私を温かく迎えて、大切にしてくださったからだ。

（心苦しいわ……）

女性の登用も、実現したのはロゼリエ殿下のお力だ。殿下が私を補佐役にと選んでくださったか

からこそ、私にもスポットライトが当たった。殿下が望まれる、働く女性の旗頭として精一杯頑張っ
てはきたけれど、それでも国王陛下から勲章をいただくほど大きな働きができたとは思えない。

「謙虚な妻は、自分の力ではないと思っただけで困ったものです」

クレセツ様は、とても優しい瞳で私を見つめた。

「お前がベタ惚れしていることは分かんなくてもいいが、お前がそこまで言う理由が私にはまだ理解
がでんな」

「姉上。僕は分かりましたよ。真の美しさ、真の聡明さ、その価値観が大多数と合致したからこそ
人心が動き、国王陛下も彼女の価値をお認めになられたのでしょう」

何を美しいと感じるか、それは人それぞれ。大多数が賛同すればそれが流行となる。流行を発信
する者の影響力は大きく、それは貴族だけでなく平民にも及ぶ。

王子殿下のお言葉で、あまりにも重いついていた勲章が、少しだけ私にも背負える重さになっ
た気がした。

「できれば広告塔だけでなく、僕とあなたでいくつか化粧品を共同開発して、両国で販売できれば
と考えています」

それは、あまりにも光栄なお申し出だ。

「難しいことはありません。僕は化粧品品の製造工場と販売店を経営していますので、一緒にコンセ
プトや色味を考えていただくだけです。権利などの問題で、共同出資とはなりますが」

つまり、前世で芸能人やインフルエンサーがしていた、お化粧品のプロデュースだ。美容部員と

して働いていた時に、私ならこういう組み合わせでパレットを作る、こういう色が欲しい、と考
えることもあった。

（こんな機会、もう二度とないかもしれない……）

前世での憧れが実現できる。それにもうひとつ、お申し出を受けたい大きな理由があった。

「共同開発でしたら、両国間の貿易の活性化にも、お役に立てるでしょうとか？」

「勿論です。化粧品は特に、他の品目と比べて取引の数が少ないですから、成功させたいですね」
それは、ロゼリエ殿下の補佐役として書類仕事をしていた時に気がついて以来、ずっと気になっ
ていたことだった。

私たちの国には、素敵なお化粧品がたくさんある。でもずっと閉鎖的な国だったから、未だに他
国にはほとんど知られていない。だからどうにかしたくて方法を模索していたけれど……

（隣国の王族のお力を借りられるなら、この機会を逃す手はないわ）

共同開発の商品をきっかけにして、他の商品の流通も促進できればと考える。きつと殿下も同じ
考えがあつてご提案くださったのだろう。それに、外から様々な感性を取り入れてこそ、流行も商
品も、新しいものが生まれていく。

（ただ……ぼつと出の私が殿下と共同開発をして、反感を買わないかしら？）

殿下がおっしゃるには、私はこの国で多少知名度があつて好意的に噂されているらしいけれど。
「光栄なお申し出で、ぜひともお受けしたいのですが……」

一緒に共同開発となると、既婚者とはいえ殿下との関係を疑われたり、疎まれたりするのではな

いか。殿下の事業の不利益になったり、ラーナ家が批判を受けたりしたらと思うと簡単には領けない。懸念を素直に口にすると、クレセツト様がさりと解決策を口にした。

「メリーナ、心配はいらないよ。君は未婚の令嬢ではなく、伯爵夫人だ。商品を世に出す際に夫の私が後援していると発表すれば、殿下との仲を疑う者はいないだろう」

いつもクレセツト様に助けていたたく形になって、心苦しいけれど……

「クレセツト様、ありがとうございます。私、精一杯頑張ります」

「それでこそ君だ。応援しているよ、メリーナ」

クレセツト様は微笑んで、背中を押してくださった。

「私は戦争を回避する。君は両国の貿易を活性化させる。立場は違うが、共に成し遂げよう」

「はい、クレセツト様」

優しい手つきで髪を撫でられて、自然な仕草で額にキスをされる。王族の方々の前なのにも思いますが、殿下方の「あれはクレセツトで間違いないよな？」という声が楽しそうであることに甘えて、私はクレセツト様を押し返すことはしなかった。

「殿下。それではまず、契約書の作成からお願いします」

「勿論だよ」
もちろんです

利益は均等に、発売時期は同日、その他にもクレセツト様と殿下は次々と条件を出していく。

（私ひとりでもできるように、しっかり覚えないと……）

同じような状況が訪れた時に備えて、集中して頭に叩き込む。

クレセツト様は、国防に関わるお仕事をしている。貿易を活性化させて外貨を稼ぐことも、国力を強くすること。それは、国を守る一端を担えるのではないだろうか。

（小さなことからでも、私にできることをするのよ）

頭の中で整理しながら覚えて、お二人の話が終わったところで、クレセツト様は突然私の手を握った。その一瞬は優しい微笑みを浮かべていらしたのに、王子殿下に視線を向けるとまた深刻なお顔に戻る。

「それから、妻の侍女であるマクガヴァンに、私の代理権限を与えます。必ず彼女を同伴させ、妻と二人きりにならないようお願いします」

「彼女をクレセツトと思えということか。いいよ。誤解されて君を怒らせるより、よっぽどいい」
王子殿下はすぐに了承された。

「それにしても、あのクレセツトが、こんなにも愛妻家になるとはね」

「私自身、予想していませんでした。それから、もうひとつ。猫を被るのはおやめください」

「クレセツトには言われたくないな」

穏やかに微笑む殿下を、クレセツト様はただ静かに見据える。

「そう睨まないでくれ。僕も大人になって落ち着いたんだ。これが今の僕だよ」

「……左様ですか」

「君が変わったように、僕も姉上も変わったんだ。昔のように剣だけでなく、これからは言葉で対話したいと思っているよ」

お話から察するに、お二人は剣で交流を深めていたらしい。私の侍女であり護衛でもあるサラさんとクレセット様のご友人のセドさんも、同じように剣で交流しているため、それもひとつの形だとすんなり納得できた。

私の知らないクレセット様の一面を、少しずつ知っていくのが嬉しい。でもやっぱり、少しだけ妬いてしまった。

そんな私の内心など気づくはずもなく、穏やかな顔のままの殿下が私に向き直る。

「ラーナ夫人。……いえ、メリーナ殿。僕のことは、ヴィンスと呼んでください」

「大変光栄ですが、王族のお方を愛称で呼びするのは……」

「クレセットの奥方なら、僕の姉も同然です。僕はクレセットの一つ年下ですし、クレセットは兄のようなものですよ」

クレセット様が小さく、どの口が、と呟いた。私が思っている以上に、仲が良さそうだわ。お父様同士がご友人なら、クレセット様と殿下も、本当に兄弟のような関係かもしれない。

「それでは、畏れ多いことですが、お言葉に甘えます。ヴィンス様」

そうお呼びすると、ヴィンス様は花が綻はなもぎぶような笑みを浮かべた。お顔立ちとは前世で見た海外モデルのような美しさと格好良さを兼ね備えているけれど、雰囲気と髪がふわふわしていて、なかなか愛らしい。

「殿下。せっかくの機会ですので、昔のように剣の手合わせをいたしましょう」

「嫌だ。手を怪我したら化粧の研究ができないじゃないか」

「怪我を負うほど、剣の腕が鈍ったとでも？」

「鈍っていないけど……嫉妬して僕に当たるのは格好悪いよ」

「当たってなど。私はただ殿下に、妻に近づく害虫になつてほしくないだけです」

爽やかな笑顔でおつしやると、ヴィンス様はぴたりと動きを止めた。

「クレセットは、本当に変わったな。前に会った時はいつもピリピリしてて、僕も姉上も君が怖くて、剣を持つてしか近づけなかったのに」

兄弟のような関係かもしれないと想像した矢先にこんな会話を聞いてしまい、そうではなかったのかしら……とこっそり内心で軌道修正を試みる。剣で会話をしていた、というのも、そもそものきっかけは、当時のクレセット様に丸腰では近づけなかったからかもしれない。

「それがこうして、君が地雷を踏まれたとあからさまに主張していても、会話が続けられるなんてクレセットを変えたメリーナ殿は、偉大なお方だ」

「妻は、聖母であり女神です」

（過大評価がすぎるわ……）

王族の方の前だというのに、クレセット様は小さくなった私をまた抱き寄せて、愛の言葉とともに私の髪にキスをした。

その後、クレセット様は軍の方々と会議を始め、私は客間へと案内された。

リビングと寝室が分かれていて、どちらからも海が見える素敵なお部屋だ。室内の装飾には貝殻

できたものもあり、まるで人魚姫のお部屋みたいだった。

(ヴェロニカ様は、着替えまで用意してくださったのね)

部屋の物は自由に使つていいと許可してくださった。クロゼットにたくさんかかっているドレスやワンピースも含まれるようで、どれもサイズを調節して着られるタイプだ。旅行用に持参した私の服は街歩き用だから、お城で過ごすには向かない。

(この国のドレスは動きやすそうね)

スカートの生地は張りがあつて、華やかな刺繍が施されている。ふわりとしたデザインなのに、下にパニエはない。

上は柔らかい生地のブラウスだけど、その上にジャケットやベストを重ねるらしく、袖がヒラヒラせず邪魔にならない。腰に巻く白い布にも美しい刺繍が施されていて、後ろで結ぶとリボンのように可愛い。その他にも、色とりどりのスカートが並んでいた。

(このスカート、髪に結んでも、編み込んでも可愛いわね)

廊下で見た人たちは、髪を覆うか結ぶか、もしくは首元に結んでいた。それ以外は見なかったけれど、ヘアバンドのようにしても可愛い色とデザインだ。

「サラさん、少しいいかしら？」

「……はい」

サラさんのまっすぐで綺麗なマロンブラウンの髪には、どんな色が合うかしら？ ミルクティー色の瞳に合わせて、優しい色もいいわね。大人っぽい雰囲気だから、寒色や鮮やかな色も似合いそ

うだわ。でもやっぱり、雰囲気を変えて可愛くしてみたい。

スカーフを持ってワクワクする私に、サラさんは一瞬表情を硬くしたけれど、何も言わずにドレッサーの前に座ってくれた。

そして、その晩。

「メリーナはベッドを使ってくれ」

「いえ、私がソファで寝ます」

「君をソファで寝させるわけにはいかないよ」

私たちは、新婚旅行の二日目と同じ会話をしていた。

クレセット様は先程、おやすみ、と言つて自然な流れでリビングに行こうとされていた。でもクレセット様は明日から戦争回避のための大事な会議が続くから、睡眠不足になってはいけない。どう考えてもベッドはクレセット様が使うべきだわ。

「クレセット様は、しっかりと心身を休めるべきです」

「君がソファで眠ると思つたら、とても心が休まらないよ」

「大丈夫です。私は狭いところで寝ることに慣れていきますので」

「だからこそ余計に、ベッドで寝て欲しい」

失言だつたと思つた時には、輝く笑顔のクレセット様に、パタリと扉を閉められていた。私は寝室側。クレセット様はリビング側。ドアノブを押さえられているのか、びくともしない。私は扉を

叩いて、不服を訴えた。

「クレセット様っ」

「今日は船での移動もあつて疲れただろうから、君がベッドを使ってくれ。明日は、私が使わせて貰うよ」

「そうおっしゃって、明日も私をこちらに閉じ込めるおつもりでしょう？」

私を大切にしてくださるお気持ちは嬉しい。でも、私は公爵家で硬くて狭いベッドで眠っていたからこそ、ソファでは疲れがしつかり取れないことを知っている。

「……君を屋敷に閉じ込めて、私だけのものになりたいとは思っているよ」

「っ！」

「おやすみ、メリーナ」

「……………おやすみなさい、クレセット様」

離れていく靴音を聞きながら、私はその場に座り込んだ。ドアノブはもう動くはずなのに、私はその扉を開けられない。

(本音、かしら……)

声がいともより低かった。もし今の言葉が本音なら、私は思っている以上に愛されているのではないだろうか。

(……誤魔化してしまったわ)

明日は寝室で寝てくださるという約束を取り付けられなかった。なんとか立ち上がってベッドに

横になっても、また先程の言葉を思い出してしまう。

妻になって二年近く経っても、クレセット様の溺愛にはまだ慣れない。それどころか毎日ドキドキさせられてしまう。窓を開けると、心地いい潮風が、火照った頬を冷ましてくれた。



この国の夜は、空が少しだけ明るい。それは、漁に出る大量の船の明かりが空を照らしているからなのだと、クレセットは知っている。

部屋の窓からはその光景は見られなかった。滞在中に、メリーナを連れて見に行ってみようか。遠くで煌々と灯る明かりに負けないくらいに瞳を輝かせて、その光景を見つめるのだろう。想像して、クレセットは頬を緩めた。

だが、自分に近づく足音を聞き取った途端、すぐに表情を消す。振り返ると、ヴェロニカが立っていた。

「クレセット、眠れないのか？」

「考え事をしていました」

「そうか。思考を整理する時に外を歩く癖は、昔から変わっていないな」

ヴェロニカは懐かしむように目を細めた。

「初めて会ったのは、お前が十一の頃だったな」

ヴェロニカは当時十二歳。ヴィンセントは十歳。長男の第一王子は十六歳で、後継者としての教育もあつたため、歳の近い三人で一緒に遊ぶよう言われていた。

だが当時のクレセットは、後になって振り返れば自分でも分かるほどに、二人と同年代の子供と云うには意識や言動が違いすぎていた。ちょうどラーナ家の仕事に直接携わるようになった時期で誰も寄せつけないようになっていたのだ。

最初の頃、ヴェロニカとヴィンセントには、視線を向けただけで怯えられた。だが、自衛のためだったのだろうか、剣を持って近づいた彼らに、少しだけクレセットの中で興味が湧いた。クレセットとしては、手にしている剣自体に関心があつたのだが、彼らからしたら自らが関心を引けたと思つたのだろう。剣で勝負だ、と張り切られてしまい、軽くあしらつたものの、それがきっかけで彼らの元来の負けず嫌いが開花する結果となつた。

そこからは、ラーナ家がこの国に滞在している間、会話らしい会話もなくただ手合わせばかりしていた。クレセットにとっては、ただ面倒な相手に絡まれたという記憶しかない。彼らと兄弟のような関係だつたかもしれないと思つているメリーナには、とてもではないが言えないことだ。

「兄上もお前に会いたかつただろうが、あいにく今は、洪水の起きた東部地方で対応に当たつている」

「王太子殿下には後日、改めてご挨拶に伺います」

「そうしてくれ。兄上も喜ぶ」

唯一王太子だけは、クレセットととともに会話をした人物だつた。その内容は国の防衛について

という堅苦しいものだったが、話は弾んだ。

この国は、王太子である長男が政治を、長女のヴェロニカが軍事を、次男のヴィンセントが貿易を担っている。軍事と貿易の全権を弟妹に渡しても一切の淀みなく機能しているのは、ただ仲が良からではなく、王太子に周囲を上手く従える能力があつたからだ。それをクレセットも評価している。

「それはそうと、悩み事か？」

ヴェロニカの言葉に、クレセットは思案する。

頼めばメリーナと別の部屋にして貰えるだろうが、夫婦仲が悪いのかと疑われてしまう。城の者に知られば、自国ほどではないにしても、メリーナが不当な扱いを受けるかもしれない。可能性が少しでもある限り、迂闊なことはできなかった。結局は、寝室とリビングで分かれて眠るのが最善だった。

「妻が可愛くて困っております」

「ただの惚気だったか」

ヴェロニカは肩を竦めた。

「だからこそ、メリーナを傷つける者は、誰であろうと許してはけません」

「分かつた分かつた。遠回しに牽制されてるんだな？ 王族相手に喧嘩を売るのは、お前の一家くらいだよ」

楽しげに笑うヴェロニカ。これが他の王族と伯爵であれば気分を害するだけでは済まないところ